

自選五十首



伊藤 一彦

いとう・かずひこ 1943年、宮崎県生まれ。大学時代に作歌を始め、卒業後に「心の花」に入会。東京の学生時代の4年間以外は、郷里の宮崎で生活している。1996年、第6歌集『海号の歌』で第47回読売文学賞を受賞。歌集はほかに『石榴笑ふな』など。宮崎県立看護大学教授。

「暎鳥記」

水中のようにまなこは暎りたりひかるまひるのあらわたなれば
海峡にすれば咽喉かゆくしてけぶれる海のはてのアメリカ
ずぶぬれながらおれは聖と夏の昏れ口を嚙める鰐ふてぶてし
空には鳥の脂にじめりにんげんの街よりとおく離れきたれば
漂泊のこころもつときあかるくて余白のごとき一本の河
月の夜のすでに追わるる立場なる君と聴きたり夏のふくろう
動物園に行くたび思い深まれる鶴は怒りているにあらずや
夜の蟬の絶えし深みに月明しこころ言葉にせざる欲び
竹むぎとある炎天下家の中の深井の蓋に置かれし卵
恥ふかくどこにも行かぬ八月の棘こそひかる青栗愛しき
高熱の子のようやくに寝ねし闇恩寵のごと濃くてひたりつ

「月語抄」

大学生の時に短歌を作り始めた。今年の九月にめでたく六十歳になるので、ほぼ四十年のあいだ短歌を作ってきたことになる。短歌を作ってきたよかつたと思う。そのように率直に言える今の自分だが、それは短歌という形式を通じてしか表現しえない何かが自分の心身の奥にあるのを感じるからである。もちろん、私の力が足りないため、その何かを十分に表現できていないということはある。その意味では、これからさらに努力の日々が待っている。

今年三月まで、「NHK歌壇」の選者を担当させていただいた。新鮮な体験であった。短歌を愛し、人生を愛する多くの人達の作品と直接出会えた。直接というのは、ご本人の

ああされど鳥うずくまる夜の内部に入りゆきがたきわれも幽暗
枯草にまじへ空蟬燃やしるつ死後なほ子なる父なるわれら

いとけなき女童三人あやしまぬ死人の国も夜深むらむ

魚を刺しまた鳥を刺し夏生きて命はくらし妻もわが娘も

蒼空の不可視の星を言ひて説く イサク殺さむとせしアブラハム

われひとり家にのこれる一日の刃を持ちてこそ樹樹脅したれ

橘の名を愛しつつかさゆふに渡れる橘がつなぐ 吾と吾を

われは鶴を君は孔雀を愛すれどわかものなりしきのふはあらぬ

弱き弱き一個の卵に過ぎざれど打ちつけたりき中央の扉に

人の死をはかなむわれをうちすてて詩家のごとくに天あふぐ猫

眼のくらむまでの炎昼あゆみきて火を放ちたき廃船に遭ふ

遣りがたきかなしみ持たば聞きに来よ日向の国の大雷鳴を

月光の詛りて降るとわれいへど誰も誰も信じてくれぬ

透きとほる水をかさねて青となる不思議のごとき牧水愛す

春おぼろ夏きらきらと秋冬は澄みに澄むなりわが青日向

肉桂の木のかたはらに亡き友の諧謔のこゑ思ひ出でたり

東京に捨てて来にけるわが傘は捨て続けをらむ大東京を

荒くれを愛しあらくれならざりしものに優しも天のむらさき

声とどくかぎりがわれのふるさとぞ空行く月に呼びかけやまぬ

海境ゆのぼる太陽息つめて待つ若き万の葉の恋ごころ

「火の橘」

「青の風土記」

「森羅の光」

「海号の歌」

書いた葉書を一枚一枚手に取って読んでいたからである。肉筆の短歌である。ワープロで打った葉書もある。それも葉書のレイアウトや文字の大きさなどには人柄が感じられるのである。ともあれ、一人一人が短歌を通じてしか表現しえない何かを作品化しようとしている熱い志をたつぷり感じた。私のほうが励まされたと言える。

私はこの八年ほど、要介護・要支援の高齢者の短歌作りの手伝いをしていく。「空の会」という「短歌出前教室」を行うボランティアグループをささやかながら結成して、方々の介護老人保健施設などに出かけている。十人ほどのボランティアグループのメンバー自身が短歌を作る喜びを感じているので、高齢者にもぜひ作ってもらえたらという気持ちで出かけている。

その活動が発展して、昨年十二月は宮崎市で要介護・要支援の高齢者の全国短歌大会を初めて開くことができた。今年は第二回の大会を開く計画で、作品を募集している。

今回の自選五十首は、既刊の八冊の歌集の中から夏の歌を中心に選んだ。選びながら、これまでのいろいろな夏を思い出した。暑いけれども、私は夏が好きである。五十歳代最後の今年の夏はどんな夏になるか。楽しみである。

朝つゆのすべり落ちたる羊齒の葉の四億年の青のひそけし

白白ましろましろと流るる川の不立文字ふりふもんじ知る人なしにかがやきてゐる

母の名は茜、子の名は雲なりき丘をしづかに下くだる野生馬

おぼれるる月光見に来つ海号うみがうとひそかに名づけるる自転車に

あかあかと照らされ飛べど栖すまなる空の体からだに触れし鳥なし

鬱深き者を入れしめ鬱払ふ森のみどりの時に憎しも

樹と人のさかひまぎれむ森に入りわれはにんげんの飢渴に歩む

質樹木にせじゆもくになりてしばしを立ちたれどころ艶めく驕りをもたず

人のある必要少しもなき樹樹ら人をいこはす死のしづけさに

夕映がいかにも恐ろしく迫るとも武器は要らずとわれは思へり

爆発を待つあまたなる地雷らの父親としてじんるいはあり

鎌を手に入りゆけば羽あをあとと怒気持つごとき夏の羊齒群

「日の鬼の棲む」

百年はおろか十年の孤独にも耐へ得ぬわれか琥珀いる飲む

ぬきんでて異形の松ひともとの一本に怯めるわれよ加勢求むな

生れたるばかりの小さきみどりごのデジカメの中にさらに小さし

生れきて一日ひとひたたぬにくさめしてまたおならしてみどりごは忙

いにしへの熊襲に射しし日の光浴びて立つなり一つ葉浜に

夜な夜なに父のむつきをわれ替へき白く小さき尻恋お尻こひし

ちちのみの父の遺ししネクタイの一本結ぶどこも行かねど

「柘榴笑ふな」